

計画を立てたからには

明日から夏休み。小学校最後の夏休みとあってぼくははりきっていた。さっそく、学校で立てためあてを紙に書いてはった。

(計画どおりにラジオ体操、学習時間を守って、バラの水やりはぼくの仕事。今年こそは……) ぼくは母に宣言した。

「夏休みの間は、バラの水やりはぼくがするからね。」

今朝も起きると、ラジオ体操に行き、出窓に置いてあるバラのはちに水やりをした。そして、すずしい朝のうちに勉強をすませた。

(順調、順調、計画どおりだな。)

ぼくは、午後からは友達と二河にこうプールへ行く約束をしている。お昼ごはんを食べ終わり、げん関げんかんでくつをはいていると、後ろから母の声がした。「目標は、紙に書いてはただけじゃだめよ。今年は三日坊主にならないでよ。」

「そうよ。ひろしは口ばかりなんだから。」と、姉が母と同じような口調で言ったが、その言葉をふり切るようにプールに出かけた。

(少しは信用してくれよ。ぼくだって六年生になったんだから、やるときはやるよ。)

家に帰ってからも、バラの水やりはぼくの日課になっていた。目の前の計画表に丸印を付けながら、自分がとても成長した気分だった。

お盆に合わせて、東京に住んでいるおじいちゃん、おばあちゃん、いとこたちがぼくの家に来てきた。おじいちゃんたちは、家に着くと、出窓に置いてあったバラを見て、今年も花を咲かせているのをとても喜んだ。「ひろしに送ってよかったわ。こんなに大切に育ててくれて、おばあちゃんはうれしいわ。」

「ひろしは、このオレンジ色のバラにどんな意味がこめられているか知ってるか。おばあちゃんと相談して選んだんだぞ。」

「そうなの。」

『きずな』とか『すこやかに』という意味があるんだ。ひろしは小さい頃、よく熱を出して入院することが多かっただろう。だから、おじいちゃんもおばあちゃんも『二分の一人成人式』を祝って、この色に決められてわけだ。」

「そうだったの。これからも大事に育てるよ。ぼくの宝物だもの。」



おじいちゃん達との話が終わると、いっしょに来ていた同い年のいとことすぐに部屋に上がり、ゲームに熱中した。いとは昔から気が合った。結局、一日中ゲームをすることになるが、めったに会えないこともあってお盆の間だけは母もうるさく言わない。お盆というのは計画どおりになくてもいい特別の日だとぼくは思っている。いとこのアドバイスで、今までどうしてもクリアできなかったステージをクリアすることに成功した。いとこたちが帰った次の日も、最後までいけると思うとがまんできずに、夜遅くまでこっそりゲームをやり続けてしまった。

「いつまで寝ているの！もう九時よ！」

母のどなり声で目が覚めた。

（しまった、ラジオ体操。それに、バラの水やり……。）

ぼくはあわてて、はちからあふれるくらいに水をやった。

次の日、水やりをしようとするバラの葉っぱはなんだか元気がない。夕方になって見ると葉っぱが落ちていた。

（やっぱり、ぼくはあまかった。「ほうらね。」と問いつめる姉の顔が浮かんでくるようだ。）

それから毎日、朝と夕方、バラにあやまりながら水やりをした。

「もう、きげんを直してくれよ。ぼくが悪かった。」
（おじいちゃんたち、このことを知ったら悲しむだろうな。このままかれてしまうのかなあ。）

最近、朝、起きて一番にバラと話すようになってきた。

「何をぶつぶつ、独り言を言ってるの。」

「大事なバラが元気になってくれたらいいなって……。」

「ひろし、人間だって毎日、ごはんを食べるでしょう。花だってお水がごはんの代わりよ。ひろしが、だらしない生活してるからこうなるのよ。お盆の時はリビングに置いていたから母さんが水やりしてたのよ。分かっているの……。」

姉はそう言って部屋を出て行った。ぼくはドキッとして部屋の計画表を見た。お盆に入ってから、丸印もなく空白のままだった。

夏休みもあとわずかになった。今年もたまった宿題に追われながら机に向かっている自分がいた。ふと、バラのはちに目をやると、くきの節目から小さな芽が出ていた。

ぼくは急いで「夏休みの生活」を開いた。「バラ復活。計画を立てたか
らには……。」と日記を書き始めた。

